

Wired for sound

By ホーマー・アッシュバーン

「テフニチオーディオ」が10年以上前のスターAV フェスティバルでランドローバーデイスカバリーにオーディオ機器を装備すべく行ったこと全てが、ヤングミュージックの演奏会の再現であり、ハイファイエンスージャストたちに、車内でもクオリティーの高い音楽再生が可能であると認知させたことであった。

現在は会社社長（！）となっているザイナル氏は、以前、最も基礎的なコンポーネンツが不足していた。それは車、しかし、その男はあきらめなかった。音楽とのかかわりあいを求め続ける情熱的ミュージックラバーとして、何の中で聞くべきか？ 今後何をすべきか？ 彼は理解していた。

“ランナーは足に最もフィットするシューズを選ぶだろう。それはカーオーディオにも当てはまるさ。君に最もふさわしいシステムを選ぶべきだよ。もちろん、何が買えるかに従って選択しなければならないがね。僕の場合、欲しいものを見つけるのに1年間、それを買うために、さらに2年間費やしたよ。”と彼は笑った。



パーフェクト！！：ザイナル氏のBMWのドライバーズシートへようこそ、本当のライブサウンドが体験できますよ！

ザイナル（以下、継承略）は3シリーズビマー（Bimmer）として誇りに思っている。彼は決して車の一部になっているのではない、何年もかけ、BMWのオーディオシステムをゆっくりとアップグレードしているのだ、車内に本当のライブサウンドを獲得するゴールを目指して。

彼が欲しいと思っていたものは、不必要に大きな音のサウンドや力強さではなく、ライブ

パフォーマンスの感動や自然音を伝えることができる的確なパワーと細部にわたる高い解像度を持ったシステムであった。それを彼の BMW に欲しかったのだ。

彼の最初のアップグレードでは、唯一使い続けるものとして、オリジナルのヘッドユニットは残しておいた。

ザブコのアンプを2台、ディナウディオのミッドレンジとトゥイーター、テフニチオーディオオリジナルの撚り線スピーカーケーブル、それに彼自ら「サブのサブ」と評するバーゲンで手に入れた最も下級なサブウーファーを装着した。

1か月後、PHD スピーカーがディナウディオに取って代わった。また、4個のテフニチオーディオオリジナルのパワーコンディショナーなるものも取り付けられた。その後、しばらくしてブラウプンクト・プレーメンのヘッドユニットが装着され、ファスの AP アンプ2台がザブコアンプに取って代わり、インターコネクトケーブルをテフニチオーディオオリジナルのものに交換した。

その後、さらに、PHD スピーカーをファス A65 0 2ウェイシステムに交換、ファス RE50 と RE100M がアンプの職務を引き継いでいる。



ブラウプンクトヘッドユニット

“パワーコンディショナーを1個取り外して、ブラックボックスと呼ばれるテフニチオリジナル新製品の signal-to-noise コンペンセーターを取り付けたんだ。それらが一緒になって作用した時と来たら、それはもう艶アリと艶ナシの黒色の壁の違いだね。音楽がまさに「ライフ」を吐き出しているんだ。”と彼は付け加えた。

ザイナルの車のシステムはどれくらい良いのか？一言でいえば、“吹っ飛ぶ”、たぶんこ

のフレーズが最も相応しいであろう。ザイナルはライブミュージック好きである；彼のシステムはそのパフォーマンスが録音されたと同じレコーディングスタジオに居るかのよう
に感じさせるのだ。

インストーラーのテスト用 CD にある、アコースティックギターのハーモニクス、温かみのある人声、それを装着することが如何にすごいか、音楽のコンストラクションが完全に（！？）実のところ、そのブラックボックスを装着したシステムは音楽をよりリアルに、そしてリスナーを音楽に没頭させるパフォーマンスを持っているのだ。

このフィーリングは特に、ドラムソロが演奏された時など特に素晴らしい。ハイハットからスネア、力強い連打まで、あたかもそこにあるかのように再現されるのだ。バスドラムのキックが、それとわかる空気の変化をリスナーの方向へ変えているのだろうか？それは、あたかもライブセッティングの中心にいるような。

これらは、ライブレコードされたテスト CD である。システムのテストにあたっては、いつも 80 年代、90 年代のテクノロジーがベストではなかった時代のアナログからデジタル化された CD を使っている。レコーディングテクニックの限界が存在するにもかかわらず、トレーシー・チャップマンのセルフタイトルデビューアルバムは興味深く聴くことができた。ザイナルのシステムは録音に生命感を吹き込んでいるように思えたのだ。

楽器間にキチンと空間をもった優秀録音にこのシステムは助けられているんじゃないかと疑いながらも、ジェームス・ブランツのオール・ザ・ロストソウルズ、グローバー・ワシントンのベスト・オブ、ワルブラー・ロビンからのトラック、ローカル・ジャズミュージシャンのロジャー・ワン・ショーンからの数トラックを聴いた。



ファス RE アンプとサブウーファー

ライトニング・シーツの賑やかなギターポップの中の手を打つ音、ザ・バーブのノーザンソウルアルバムからの難しい何曲か、クローデッド・ハウゼズのトゥゲザー・アローンアルバム（趣のあるムード満点）、ザ・スタイル・カウンシルとデイビッド・グレイそして、この愛すべき BMW のドライビングシートからこの出版校正人（私）を引き離すものは何もない。

たとえ、ジョン・レジェンドやシェイラ・マジッドのライブレコーディングの中にあるように、音響的に複雑化したとしても、あるいはバイオレット・インディアナやデービッド・シルビアントラックにあるような、ムード効果を効かせすぎたとしても システムは忠実、デリケートに仕事をこなし、あらゆる録音に対して眼には見えないバックボーンとなるハーモニクスや趣をキッチリと再構築するのだ。

ところで、我が BMW 運転会社の社長（ザイナル）はこのシステムについてどのように感じているのだろうか？

彼は、4つのタイヤの上にベストなシステムを搭載できただけでなく、同様な感動をホームハイファイシステムで味わうためにはその何倍も出費が必要となることを考えながら、とても喜んでいたので。

“現在の僕の車から得られるサウンドをホームシステムでやろうとしたら、オーディオ機器やルームアコースティックなどに莫大な投資が必要になるんだ。それは、僕が今までマイカーに費やしてきた金額をはるかに上回るのは確かだよ。”と、彼のトータルの支出を明らかにすることを上品に断りながら言ったのであった。

“長い時間がかかったね、しかし、僕みたいなミュージックラバーにとって、それは価値のあるものなんです。ある時、友達にクレイジーと言われましたが、僕は言ったんです、「君は音楽にいくらお金を投資できるんだい？」とね。”

出所：<http://star-motoring.com/news/story>